

日常茶飯事

日常
茶飯事

山本夏彦

日常茶飯事

320円

著者・山本夏彦 発行所・東京都港区芝
琴平町 29 株式会社 工作社 電話
(501) 3829 印刷所・東洋社印
刷株式会社 昭和37年9月10日発行

推 輓

吉 田 洋 一

この本をよむと、なかには、著者山本さんのつむじは曲まがまっていると思う人がいるかも知れない。ともかくも、著者のいうことはありふれた評論家や文化人のいうことは少しばかり変っているようなのである。

しかし、つむじ曲りというのは、肩肘かたひじを張ひつて、ことさら異をたてようと努める人を指さすことばである。裸はだかの王様が裸であることを発見したからといって、その子供をつむじ曲りとよぶことは当をえないだろう。

山本さんは「王様は裸だ」といったようなきわめて素直すなおな意見やら感想やらを、この数年間、その主宰する雑誌「室内」に書きつづけてきた。わたしは雑誌が届く毎に、まず、まっさきに、著者の「日常茶飯事にちじょうさはんじ」をよむのを常としていた。家人にいたっては、ほかの記事には目もくれず、山本さんの文章だけを愛読していたらしいのである。

山本さんの文章は決しておとなしい文章ではない。それに、その内容も、(素直なるが故に)当世ありきたりの通り一片のものでないことは前にもいったとおりである。それなのに、これをいっしょに読んでも少しも反撥はんぱくを感じさせないばかりか、あんなにも魅力をもつのはどうしてなのだろうか。これは、わたしたちが、山本さんと同じように素直な性質であるせいなのだろうか。それと

も、山本さんは文を草するとき特別な秘訣をもっているのだろうか。こんなことが我が家の茶の間の話題になったことがあるが、この疑問はいまにいたるまで解決されていない。

おおぜいの人がよんだら、こういう疑問に対しても、おのずから、解答が与えられることになるだろう。そのためにだけでも、ぜひ、なるべく多くの人にこの本をよんでもらいたい——「日常茶飯事」が単行本になるときいてこんな勝手なことを考えた。

飯 沢 匡

「室内」が改題する以前の「木工界」から愛読しているが、その編集が心憎いので、どういう人が編集長かと考え出したのが、そもそも山本夏彦氏を注目する機縁になった。そうなってみると、氏の随想が連載されているので読むようになり、これは一筋縄で行かぬ人と感じた。

だが、まだ同氏にはお目に懸っていない。しかし、胃弱の人で瘡型で瀟洒な紳士だろうと勝手に想像したのだが、同社の記者に尋ねてみたら大体当たっていたようである。

この随筆集を通読すると、ちらちらと自伝の片鱗みたいなものが現れて来るし、この集には載っていないが「豆自叙伝」を書かれたのを見ると、こういう人物を生み出すには三代かかっている。一昔前の中国などにはこういう「読書人」がいたのだろう。そして野の遺賢などといわれたものであるうか。

要するに我々が如き売文の徒が書き流す物欲し気な文章とは事かわり、本当に「腹ふくるるわざ」が自然に出て来るものだけを書きとめたていの、いわば贅沢な随想である。氏の筆にかかる「日常茶飯事」が、一生の一大事になるから不思議である。本来、随想とはこういうもののな

であるが、ジャアナリズムを無視して言い度いことをいつてる境地は羨むべきであるし、また当節珍重すべき現象であろう。

雑誌の編集者が、ジャアナリズムを無視してるところに矛盾があるようだが、私がすくなくとも「室内」を愛読してるのは、その点である。

古い伝統を保ち続けている無名な職人衆のドキュメンタリーとか、消えてゆく木造洋風建築物の写真とか、私の好みのものは、現今のジャアナリストなら馬鹿にして取合ってくれないのだ。だから実は山本氏こそ本当のジャアナリストなのかなとも思っている。

この集を読んで、私と関係のあることが二つあるのを発見した。

山本氏によって棟割長屋ときめつけられたアパート山月房には、私は当時住んでいて大に便利さを喜んでいたのである。もう一つは「怒るが勝」という私の随想集の題名を引用して居られることだ。この二つだけでも私が、これを書く因縁があつたというものである。

福田恆存

「室内」に連載された山本夏彦氏の「日常茶飯事」は、私にはめつたに無い事だが、雑誌が届くと待つてゐたやうに必ず目を通した。

それは一見、古風な言廻しで、内容にも古風な事が出て来る。だが、内容はもちろん、言葉遣いでも、単なる古風な人間のそれとは違ひ、甚だ意識的で、随つてなかなか料で洒落てゐるのである。古風に言へば「ハイカラ」なのである。

一体、この人は何者かと、私は少からぬ興味をそそられた。いや、過去の話ではない。今でも興味をそそられている。詰り、いまだに正体が掴めないのだ。確かに私と似たやうに考へ、私と似たやうなことを書いてゐる。だが、私とは違ふ。どこが違ふのか。

私も人に天邪鬼^{あまのじやう}と言はれ、反時代的と思はれてゐるが、山本氏のそれと較べれば多寡^{たか}が知れてゐる。それこそ五月の鯉^{さうま}の吹流^{ふなが}しで、あつけらんとしたものである。が、山本氏の天邪鬼振りは遙かに深刻で、根は相当に深い。現代を拒絶^{ききぜつ}する抵抗力も私など到底及ぶ処ではない。山本氏の書くものを読んでゐると、私達読者にはもちろん、山本氏自身がまだ氣附かぬ、あるいは、氣附いてゐても人には見せたがらぬ暗面があるやうな氣がして来る。これは一寸不氣味な感じである。それは一体何であらうか。

反時代的といふのは、私にとつても山本氏にとつても、一つの仮面^{かめん}に過ぎない。だが、山本氏の場合、この仮面の下にあるものは、大げさな言葉だが、「虚無の深淵^{しんえん}」ではないか。少々読者を嚇^{おどか}し過ぎたやうである。実は、私は山本氏といふ人をそこまで考へて、そこで一転して、いやこの「虚無」もまた山本氏の好んで附ける仮面ではないかと思つてゐるのである。その下の山本氏の素顔は優しく柔和^{にやわらか}で傷付き易く、だからこそ「虚無」といふ鉄の仮面を着用^{ちやくよう}しなければ、世間に附合^{つあひ}つてゆけぬのではないか。

いや、そんな理窟^{りくつ}はどうでもよい。山本氏の本性^{ほんしやう}がどうであらうと、読者は「日常茶飯事」の毒舌といふ在り来り^{ざんざん}の言葉が色あせて感じられるほど新鮮で魅力のある文明批評、風俗批評に染しく耳を傾けてゐればよいのだ。この出版を機会に、ひよつとすると「天才」かもしれない山本氏が、それを縦横に發揮して、凡愚^{ばんぐ}の虚を突き、世間を無明から救済^{きうさい}する時の到らん事を祈つて止まない。

日常茶飯事

装幀・挿絵

深尾庄介

目次

長持	一
インテリ	四
おむすび	八
神妙	三
義乳時代	七
終のすみか	三
タレント	七
アパート山月房	三
レインコート	三六
落第	四〇
「木工界」由来	四
内と外	究
兆民先生	三
客	七
契約	六

ぱくぱく 壺

御無用 完

あんぽんたん 七四

北海道紀行 七九

この国 八三

迎合 八六

秋刀魚 九三

百年目 九六

夢で女に 一〇三

大辻司郎 一〇八

室内 一二三

わが女性崇拜 一二八

君子多忙 一二五

日記のすすめ 一二三

鴛鴦 一四二

旅行者 一四九

試験問題 一五七

就任演説 一五五

無病息災 一七三

新聞週間 一八一

自ろう車 一九〇

作り話 一九八

本屋 二〇五

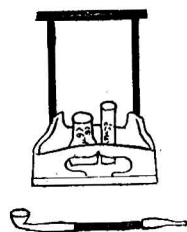
スピードきちがい 二三

つむじ曲り 三三〇

洋行 三三七

ニュールック 三三四

長持



いつのまにか姿を消した和家具に、長火鉢と、文机と、長持がある。

長火鉢は、今も和家具の展覧会には、申訳けのように一つ二つ出ている。唐木や神代杉で作った美術品のような作品である。実用品の方は時々古道具屋でみかける。たまには買う人があるのだらう。

長火鉢といえは、思いだすのは煙草盆である。「源治店」のお富は、長火鉢を前にして、長羅字のきせるの雁首で、煙草盆をひきよせ、ゆるりと一服吸っていた。蝙蝠安のせりふを聞き流している間のことと覚えていてる。

長火鉢は妾宅ばかりにあったのではない。昭和初年までは、健全な家庭のどこの茶の間にもあった。というより長火鉢を据えて、はじめて茶の間らしくなったのである。

煙草盆は両切の巻煙草の出現によって、桐の文机は万年筆の普及によって、滅びた。文机もあ

れで、昔は実用品だったのである。

誰しも手習いのはじめには、師匠に「懸腕直筆」ということをやかましく言われる。文字が萎縮して躍動しないから、肘をついて筆は使ってはならない、肘を宙に浮かして書け、というほどの教えである。それに従って、文机を前にした往時の婦人は、左手に巻紙、右手を宙に遊ばせて、さらさらと筆を動かした。書き終った部分は机上に、やがて膝にたれた。文机の高さは一尺そこそこ、わずかに膝をいれるにたけりだけしかなかった。これに西洋紙をのべて鉛筆で書けば、桐の表面にきずがつく。姿勢は前こごみになりすぎる。

坐高がうす高くもりあがった、現代婦人の膝は、桐の文机の下にはいらぬ。無理に入れたらめりめり音を発してさけるかもしれない。明治の婦人の膝はあれにはいった。当時の婦人は五尺にたりないのが一般で、それ以上あれば高すぎると非難された。

「金色夜叉」の主人公貫一は、鴨沢宮の心変りをなじって、言い争ったあげく、その弱腰をはたと蹴った。宮はたおれ、貫一は不覚に馳せよるとは、名高い熱海の海岸のくだりだが、貫一は五尺二寸、宮は四尺八寸位しかなかったかと疑われるふしがある。

一流のファッション・モデル、ヌード・ダンサーの平均身長は、いま五尺四寸、だからその弱腰をはたと蹴っても、首尾よくたおれてくれるかどうかはわからない。

煙草盆も文机も、すべて滅びる理由があつて滅びたのである。

ただ長持だけは、茶箱と交代した。和家具屋が油断して、長持の存在を忘れているうちに、いつか茶箱が進出して、長持の座にすわってしまった。

うちがわに錫をはった巨大な茶箱は、当分不要な衣類をしまっておくには重宝である。近所の茶を売る店にたのめば、四、五百円で譲ってくれる。デパートでも売っているそうだ。だから今はこの家庭にも一つや二つころがっている。千代紙をはって、きちんと二つ並べて、押入れにしまつてあるのを往々見る。

けれども、あれは本来家具ではない。家具の領分を茶箱におかされては、家具屋の面目はなかるうと、その腑甲斐なさを中心ひそかに咎めていたら、近ごろ「アパルト展」でユニット家具というのをたくさん見せられた。それは寸分たがわぬ箱家具で、都合で、縦につんだり、横に並べたりできるものである。

なんのことはない、ヒントは茶箱ではないか、横に三つも並べれば、新式の長持ではないかと気がついた。

インテリ



インテリというのは、ロシヤ語のインテリゲンチヤから出た言葉で、本来十九世紀末の知識階級のことだそうだ。この語はわが国では、昭和初年に輸入され、されるや否や、ゲンチヤはちよん切られ、インテリと名を改め、たちまち流行して日本語になった。

昭和初年のインテリは、労働者に対して、後ろめたい気持をもっていた。恥じてさえいたようである。青白いインテリといわれ、労働者側からは、重んじられてはいなかった。

弁舌はさわやかで、才覚もあるが、真の味方ではない。二十九日もブタ箱にいれられれば、必ず転向するにちがいない口舌の徒とみられていた。

両者には共通な言葉がなかった。インテリは労働者のなかにはいると、いろいろ苦心を重ねたが、成功はしなかった。労働者はずいに胸襟を開かなかった。

聞かないのはインテリ臭が邪魔するからだ、インテリは反省し、かつ悩んでいたようだ。小